

佐伯地方の姓氏(一)

佐 脇 貫 一

かつて私は三猿子生の筆名で、地方新聞に「私どもの苗字」を百余回に亘って連載した。それから十年余、私の調査研究もいささか進捗したので、昨年来「週刊ポケット」に「佐伯地方の苗字」と題して、佐伯地方の苗字と紋章について連載しているが、これはいわゆる「紋章ブーム」を意識した記述になっているから、稿を改めて「佐伯地方の姓氏」と題し、佐伯市、南郡の苗字について纏めてみたいと思う。

◇

ところで佐伯地方の姓氏ということになると、地方的あるいは伝統的なものが多く、また郷土の歴史に関連したものが多し。そこでまず姓氏と苗字の相違から記述することにする。姓氏の姓は「かばね」と読み、古代豪族の氏の称号(家格)をあらわし、官職的意義をもったが、

氏(うじ)は共通の祖先をもつ同族の称であった。しかし、平安時代中期には姓制度が崩壊し、また貴族の支配下にあった部曲の民は、公民として部名を氏にしたが、これも奈良時代末期以来、貫籍地から流亡して、本貫を失う浪人が続出したため、氏を戸籍に登録されるものが少なく、氏もまた崩壊に瀕するようになった。そして氏に代って普及したのが字(あざな)である。

〔註〕貫籍地||律令制の本籍地、本貫||本籍。

字とは仮名(けみょう)のことで、実名に対するもの、つまり私称である。大神姓佐伯氏系図によって字(仮名)と実名を見よう。大神惟基の九子、長男政次(実名)は高千穂太郎または三田井太郎(字)、次男惟季(実名)は阿南次郎(字)、三男惟則(実名)は野尻三郎(字)、四男惟顕(実名)は直入四郎(字)、五男惟清(実名)

は城原五郎(字)、六男惟通(実名)は朽網六郎(字)、七男季平(実名)は植田七郎(字)、八男榮基(実名)は大野八郎(字)、九男惟盛(実名)は三重九郎または九郎太夫(字)となっている。いずれも上半分は居住地の地名、下半分は輩行である。この上半分の地名が苗字の起原である。

〔註〕輩行(排行) Ⅱ同族中の年の順序。

苗字はまた名字と書く。成語の古さからいうと苗字より名字が古い。苗字の苗(なえ)にはチスジ(胤・子孫)、モロモロ(衆庶)などの意があるため、名字の当字となったものと解されている。鎌倉時代以前は父子兄弟がその苗字を異にし、一代の間にも二、三度変っているものがある。初期の苗字は字の一部にすぎなかったが、鎌倉時代からだいたい固定し、分家しない限りは代々同じ苗字を継承するようになった。大神系図によると阿南惟季の子惟房の長男惟隆が阿南次郎、次男友隆が小原次郎、三男義隆(能隆)が大津留三郎、四男隆平が武官四郎、五男隆家が橋爪五郎となり。大野榮基(八郎)の子は大野次郎基平、次男は敷戸三郎定平。基平の子盛基の子が大野六郎家基、その子が神角寺で大友氏入国に抗したという大野九郎泰基。また三重九郎太夫惟盛の子は臼杵大

六惟衡、その子は同大七惟用、この惟用の子に臼杵太郎惟隆、緒方三郎惟榮、佐賀(加)四郎惟憲があり。惟用の第三重惟家の子に戸次二郎惟澄、佐伯三郎惟康(庸)がある。いずれもそれぞれの苗字の始祖であり、それらの苗字がその居住地の地名であることに注意したい。

武家の字が苗字になったように、公家(貴族)にも居住地に官職名をつけた字があり、しだいに氏に代わるようになった。これが近衛・一条・九条・中御門・万里小路・烏丸など堂上家の称号で、これも鎌倉時代以後に固定した。



古文書にあらわれる百姓(衆庶)には氏や苗字がなく、名ばかり載せている。これは古代の奴婢に氏がなかった名残りで、支配下に対する社会一般の風習に基くものである。

室町時代の一般的武士は名主みよしのしゅあるいは小地頭などの後裔で、各々その部落を支配していたが、戦時には一族や部落中の壮者をひきいて、守護あるいは付近の豪族に属して出陣した。この部落中の壮者とは百姓(農民)であって、仲間・小者といわれ、苗字はあっても名乗らぬ風

習のあった階層である。

応仁の乱後はいわゆる弱肉強食の戦国時代、各地の小豪族はしだいに強者に隸属するか、あるいは帰農して整理された。こうして織豊時代となり、豊臣秀吉は兵農分離を実行、百姓・町人をはじめ神官・僧侶の武器を没収した。この時代の出世大名はこれまでの小豪族でもなければ武士階級でもない農民層の出身者であった。秀吉をはじめ加藤清正・福島正則・石田三成・小西行長らはいずれも百姓（農民）・町人の出身、佐伯藩祖毛利高政もまた尾張の農民層の出で、秀吉麾下の将領として風雲に乗じた人々である。従ってこれらの人々は本来の氏や苗字をもたないから、武士になると各自縁故を求めて苗字を名乗った。

徳川時代になると、封建藩制が確立し、一般の百姓・町人に苗字を称することを禁じ、大庄屋・庄屋・町年寄などで士分待遇をうける者だけが苗字帯刀を許された。苗字帯刀の許可は庶民に対する恩典に利用され、例えば百姓・町人であっても藩主の女縁で士分となり、苗字帯刀を許される者が多かった。しかし、百姓・町人でもそれぞれ由緒ある家の子孫は、苗字を私称しそれを誇りと

した。この苗字の私称は天領（幕府直轄地）ではすこぶる寛かで、藩領では藩にもよるが厳しく取締った。佐伯藩では領内に天領が分布していたためか、苗字の私称は比較的緩やかであった。もっとも公式には百姓某・町人某で、公文書のこの書式は天領・藩領で区別はなかった。

明治維新になり廃藩置県が実施され、武士（士分・卒）足軽・目見格）は士族、百姓（農民・工匠・町人）は平民となった。そして政府は平民に氏（苗字）を称することを許したので、一般人民は各々の苗字を名乗り、あるいは新しい姓氏（苗字）を造って、その族称（士族・平民）と氏名を所属町村の戸籍簿に登録した。

（明治四年四月、戸籍法が制定され、翌五年二月から全国各地で戸籍登録が行われた）

佐伯地方でも大分県権令（知事）森下景端の命令で戸籍登録が実施された。城下ではそれほどの混乱はみられなかったが、農漁村では文盲の者が多かったため、庄屋・地目付などの村役人、寺小屋の先生、神官や僧侶などの知識人に頼んで早速の苗字づくり。ある者は居村の庄屋・旧家の姓、ある者は知遇をうけた藩士の姓、ある者

は物語や芝居・狂言の登場人物の苗字、ある者は住居の環境にある事柄・地名などから苗字を考えてもらった。

佐藤鶴谷翁は生前、私に戸籍法実施当時の状況を話してくれた。

「明治五、六年の頃、自分は師範学校に入っていたが、戸籍簿作成に狩り出された。分担は切畑・直見方面、どこの部落であったか忘れたが、住居の傍に小川があり柳があったので柳川、屋敷の入口に大杉があったので大杉、前の畑に岩が見えたので岩畠と名付けたが、縁もゆかりもない姓を名乗るよりましだと思った。」
そして米水津村浦代の庄屋織戸氏が、村人に紋付羽織を買ってこさせ、その定紋を見て苗字をつけ、上浦の村役人が武鑑から苗字を選んだことを話した。

◇

さて苗字奇談はこれぐらいにして、だいたい守護・地頭といわれる武家は自領の地名を苗字にしたが、その配下の武士（被官）は居住地の地名を苗字にした。（大友氏は相模国大友郷地頭郷司職であった。大友郷Ⅱ大友庄・足柄下郡に属したが、現在は小田原市。臼杵氏は海部郡臼杵庄。佐伯氏は海部郡佐伯庄。）

苗字の発祥地を苗字（名字）の地というが、発祥地つまり起原地には反ってその苗字がない。それは戦乱の多い時代、一村一邑の領主であった武士が、その土地を永く子孫に伝えることが出来なかったため、彼らは時の権力者に従属したから、しばしば祖先の地を離れた采地（領地）を与えられたのである。

豊後国岡田帳によると、佐伯氏（弥四郎政直）は佐伯庄本庄百二十町を領し、鎌倉幕府の地頭御家人ということになっている。佐伯弥四郎政直は父祖以来佐伯庄に住んでいたため佐伯氏を名乗っていたのであるが、佐伯庄の領家は毛利判官代で、佐伯氏は地頭であった。豊後守護職として入国した大友頼泰によって鎌倉御家人としてきょうみやう交名された佐伯庄本庄の地頭佐伯政直は当然大友頼泰に従属した。しかしまだこの時代に、はっきりした従属関係があったかどうか疑問である。

佐伯氏の被官（家臣・武士）である高畑氏は下野村高畑（あるいは古市村高島）、塩月（汐月）氏は長良村汐月、泥谷氏は堅田村泥谷、宮脇氏は切畑村宮脇が苗字の発祥地である。

〔註〕被官Ⅱ中世末、在地領主の家来で、屋敷地の一

部と田畑を分与され、耕作しつつ主家の軍事・家政・農耕に奉仕したのも。

◇

姓氏研究家の渡辺三男氏は『日本の苗字』のなかで、全国の大姓として佐久間英氏の苗字ベスト二〇をあげ、これは「鈴木・中村犬のくそ」とうたわれるほど、わが国の家の名（苗字）のなかの代表的なものといっている。佐久間氏の集めた苗字ベスト二〇とは

鈴木・佐藤・田中・山本・渡辺・高橋・小林・中村・伊藤・斉藤・加藤・山田・吉田・佐々木・井上・木村・松本・清水・林・山口（多数順）

の諸氏で、そのほとんどは佐伯地方にも多い苗字である。そこで私は電話番号帳によって佐伯地方の苗字ベスト五〇を集めてみた。順位は次のようになっている。

渡辺・小野・河野・矢野・後藤・川野・佐藤・山本・染矢・吉田・高橋・清家・山田・児玉・御手洗・甲斐・戸高・安藤・柴田・田中・塩月・柳井・石田・山崎・池田・高野・広瀬・富高・宮脇・工藤・森崎・安部・木許・三浦・井上・神崎・神田・菅・坂本・野々下・加藤・足田・宮本・伊東・五十川・成松・松田・日高・

江藤・岡田

の五十氏である。全国的な苗字のうち、鈴木・小林・中村・伊藤・斉藤・佐々木・木村・松本・清水・林・山口の十一氏は佐伯地方のベスト五〇には入っていないが、いずれもある苗字である。

また豊田武氏は『苗字の歴史』のなかで、大分県に多い苗字として、佐藤・工藤・斉藤・高橋・鈴木等の諸氏をあげ、大友氏の入国に従った鎌倉武士の移住が多かったからであろうといっている。しかし、佐伯地方は大友氏にとっては外様の、国衆といわれる佐伯氏の蟠居した土地であるから、佐伯氏家中には鎌倉武士の系統と思われる苗字が少ない。『大友興廢記』や『柵牟礼実録』が伝える佐伯家中の苗字で、現在まで残っているのは次の諸氏である。

長田・染矢・柴田・塩月・泥谷・神志名・広末・川野・河野・阿部・高司・御手洗・菅・宮脇・矢野・後藤・岡部・川辺・飛弾・安藤・高木・寺嶋・狩生・出納・池田・高畑・山本・深田・柳井・山田・児玉・広瀬・佐脇・三浦・清松・臼井・野々下・加藤・多田・吉良・高野・稗田・三代・橋迫

◇

文禄二年（一五九三）大友義統は朝鮮の役の失策によって豊太閤秀吉の怒りにふれ、豊後一國を没収された。柵牟礼城主佐伯惟定は、主家大友氏に殉じて佐伯を去り、伊豫板島（宇和島）城主藤堂高虎の客となった。慶長六年（一六〇一）四月、日田隈城の毛利高政は改めて佐伯二万石に封ぜられ入部したが、このとき随従した主な家士は次の諸氏であった。

戸倉・沼・岡崎・磯部・樋田・関・西名・斉藤・坂本・梶西・羽野・高瀬・長・矢野

高政が佐伯に入部した後、来り仕えて重用された諸氏には

並河・益田・梶谷・三好・豊田・簀川・加島・赤沢・間・鷲塚・佐久間

このほか高政時代の御歩行衆には（重複を除く）次の諸氏がある。

野下・林・宮川・三瀬・上田・平嶋・山本・玉井・水野・大賀・権藤・山川・黒木・佐脇・下村・中村・山元（御歩行衆は二十一人）

こうした佐伯藩初期の家中には、大友氏の浪人、佐伯

氏の遺臣、諸国から来り仕えた浪人などさまざまな経歴をもつ人々が多かった。そしてこれらの中には藩政二百六十余年間を存続した家々も少なくないが、何かの事情で致仕し帰農したものや、あるいは商家となり城下作りに貢献したものもある。また罪を得て絶家追放されたものもあり、相当多くの変動があったことは確かである。次は天保年間の御家中席帳から重複したものを除いた諸氏である。

関谷・山崎・袋野・阿南・山口・明石・古川・山名（赤沢改め）・宮本・小林・国矢・高橋・中根・長溝・古賀・長谷川・竹中・遠城寺・保田・土屋・桑原・山中・松井・秋山・浅沢・田中・佐藤・梶川・太田・中津留・平野・岩本・田原・三木・小島・大石・薬師寺・谷川・小野・奥井・池永・今泉・小沢・津田・知神・柳川・下川・水筑・千葉・首藤・菅・宮脇・野村・川野・今井・加藤・児玉・高妻・泥谷・木許・松岡・杉原・和田・安藤・矢谷・須田・片岡・黒田・佐野・古田・松下・吉田・梅田・尾間・永野・小田部・満江・楠・江藤・深津・浅田・伊東・伊藤・中嶋・藤田・安永・木村・井沢・平山・白井・小寺・田村・岩崎・堺

田・宮崎・竹田・渡辺・富沢・横井・甲斐・河村・吉野（以上十分である）

ほかに足軽・目見格・船頭など十分に対して卒族とよばれ、明治五年一月、士族になった約百五十氏がある。

重複をさけてその主な苗字をあげておこう。（明治四年廃藩当時）

橋本・小谷・滝・園田・飯沼・成泊・市野瀬・河野・寺本・石井・日置・大竹・谷・柴田・石丸・宮田・金子・李野・大鶴・吉垣・山野内・田吹・石川・平井・曾宮・横田・染矢・^{みの}養部・沢田・木原・井戸・御手洗・大島・山岡・羽田・池田・石田・坂東・久保田・佐田・大島・緒方・松野・藪・富永・増村・岡野・清田・江口・山内・後藤・矢川・塩月・矢田・河内・小幡・軸丸・黒川・大崎・吉川・山路・松本・清原・長田・田島・増野・山田・龜山・金田・吉岡・越部・衛藤・松田・大塚・中岡・西村・今川・豊島・仲矢・浜野・田川・浅利・岩田・牧方・龜井・池月・岡沢・小夜（以上八十八氏、他は重複した苗字）
ここにあげた苗字は足軽小頭・目見格・船頭・坊主・料理人（賄方）・小人頭・馬医などである。



佐伯氏の被官（武士）に従属した身分の低い農兵は、苗字はあっても日頃から名乗ることをはばかる風習があったので、藩政時代になると、被官百姓あるいは名子とよばれて、まったくの農民となり、本百姓（地主・本家）に従属する子百姓（高持百姓・新宅）となった。佐伯藩領の村役人は大庄屋・庄屋（肝煎）・地目付（組頭）・頭百姓（百姓代）などで、末端機構は五人組制。そして大庄屋は徒士待遇（十分待遇）で苗字帯刀を許された。安政四年の記録によると、藩内の大庄屋は二十四人で、その上に惣庄屋（大庄屋の代表）一人ないし二人があった。城内郡代役所の一郭に詰所（吉野役所）があった。領内二十四村の大庄屋は次の諸氏である。カッコ内は居村。

- ▽下野村 染矢来太郎（高畑）
- ▽古市村 江藤又左衛門（駄市）
- ▽上岡村 小野弥四郎（本郷）
- ▽切畑村 出納藤七郎（江良）
- ▽下直見村 佐藤由助（水口）
- ▽上直見村 甲斐弥五六（竹ノ下）
- ▽赤木村 安藤佐平（堂師）
- ▽仁田原村 小野茂十郎（柚ノ原）
- ▽横川村 竹田九郎治（月形）
- ▽因尾村 高野只八

郎(堂野間) ▽中野村 川野宇八郎(笠掛) ▽上
 野村 出納源五郎(上小倉) ▽大坂本村 市野瀬宇
 兵衛(宮ノ下) ▽海崎村 笠村広助(山ノ口) ▽
 狩生村 吉田悦右衛門(仲間) ▽戸穴村 広瀬文之
 丞(地藏河内) ▽堅田村 芦苅牧太郎(江頭) ▽
 木立村 泥谷齡左衛門(中野河内) ▽津久見村 西
 郷又左衛門(赤河内) ▽津久見浦 岩崎太左衛門
 (岩屋) ▽中浦村 軸丸善兵衛(吹浦) ▽米水津
 浦 御手洗善右衛門(色利) ▽入津浦 三原平兵衛
 (畑野浦) ▽蒲江浦 白岩儀十郎(蒲江地下)
 佐伯藩の城下づくりに協力して、内町・船頭町の商家
 となった人々には、佐伯氏・大友氏の遺臣や藩祖高政の
 知遇をうけた武士が多かったが、禄仕を辞して商人とな
 った。それらのなかで明治維新まで存続した主な家の屋
 号と苗字をあげよう。

安土屋(今泉)・丸屋(新納のち山内と改める)・讚
 岐屋(渡辺)・判屋(今泉)・和泉屋(和泉・月本)
 ・伏見屋(青木)・尼ヶ崎屋(山田)・保田屋(保田)
 ・和久屋(花井)・塩屋(武藤)・丁子屋(田代)・
 油屋(今泉)・京屋(井上)・小丸屋(山内)・加島

屋(東)・米屋(大賀)・塩飽屋(高林)・天満屋(山
 県)・新屋(佐脇)・福島屋(山本)・麴屋(浅利)
 ・日向屋(田島)・潮屋(土谷のち土屋)・正木屋(高
 司)・松本屋(今井)・元屋(小夜)・大和屋(宮崎)
 ・長崎屋(吉沢)
 都市では居住者の移動が多く、往時の在地性が失われ
 ている。従って苗字(姓氏)の種類も千差万別、佐伯市
 を例にとっても、電話帳に載っている苗字だけで約二千
 種を数えることができる。都市に比べると田舎(農山漁
 村地域)は住民の移動が少なく、気風も保守的な面が強
 いので、同姓が密集している。次に佐伯地方の苗字で土
 着性の濃いものや、部落特有のものをあげてみよう。
 (旧佐伯市内) 渡辺・武藤・鎌田・鍵野・勝田・勝間
 田・宮崎・高山・吉村・坪村・今泉・幸木(以上臼坪
 ・中村)。金田・松下・山西・岩本・大賀・工藤・高
 木・高石(以上女島・長島)。佐藤・黒沢・白井・金
 内・大岩・樋口・川人・中鶴(以下灘)
 (鶴岡地区) 三浦・増村・泉・佐野・原・染矢・秋坂
 ・広瀬・平山・高野・古川・高治・藤本(以上鶴望)。
 赤峰・池辺・米沢・福島・穴見・木許・佐脇・江藤

(以上稲垣)。宮本・梅田・岩木・角田・伊達・今山
(以上上岡・櫻野)。

(上堅田地区) 伊東・大地・大司・繁里・野口・松垣
・内田・池田・肥川・前田(以上久部・蛇崎)。天野
・梶川・茅野・寺嶋・高畑・高島・川原・大川・大石
・小野・大崎・川野・戸篠(以上長谷)。

(下堅田地区) 森脇・岩田・富尾・中島・野々下・野
々上・白井・三股・御手洗(以上長良)。汐月・清松
・和田・河野・疋田・大神・元長・吉良(以上堅田)。

(青山地区) 安藤・甲斐・司農・大良・多田・後藤・
山口。

(木立地区) 清杉・歳納・成迫・新名・井戸・岩谷・
肥後・山内・泥谷・山崎・田西・山田・小川・大原・
川井・永田。

(八幡地区) 山本・上田・垣野内・笠村・箕河原・吉
田(以上海崎・百枝)。菅・高原・広末・保田・大島
・大鶴・狩生(以上戸穴)。岩佐・鶴野・尾崎・佐倉
・補陀・久保田・神志名(以上霞ヶ浦)。

(西上浦地区) 上杉・菅・石川・松本・福谷・越名・
局・奈須野・田村・清田(以上護江川宮ノ内・指夫・

小福良・中川原)。小寺・近藤・龜山・戸高・西島・
産谷・石田・石谷(以上狩生・車)。岡田・神田・黒
佐・石丸・長浜(以上二栄川古江・晞干)。

(大入島地区) 神河・下川・田中・坪根・芦茹・東・
浜野(以上石間・守後)。古戒・清家・丸山・瀬山(以
上荒網代)。団塚・中矢・石山・川下・平川・中谷(以
上塩内・日向泊)。増永・柴田・柴富・浅利・道脇(以
上久保浦・片神・高松)。

次に佐伯市以外の郡部八町村の苗字で部落特有(佐伯
市各地区で列記しないもの)のものをあげよう。

(弥生町地区) 一瀬・市野瀬・高司・荻・高次・河合
・新納・所賀(以上旧明治村)。出納・大矢・黒木・
市原・神毛・宮脇・伊賀・加藤(以上旧上野村)。安
達・川田・田原・吉岡・盛田・荒牧・菅田・猪野迫・
北山・入江・梁井・仲野・鶴原・松岡・五十川・又見
・林・柳川(以上旧切畑村)。

(本匠村地区) 玉野井・岡川・大竹・品矢・高橋(以
上旧中野村)。橋本・久々宮・柳井・稗田・河原・三
城(以上旧因尾村)。

〔直川村地区〕村上・河村・飛河・清水・下岡・曾宮
・高瀬・橋迫・木下（以上旧直見村）。武田・立箱・
桜井・簀戸・飛田・稲好（吉）・曾根田・広田・森竹
（以上旧川原木村）。

〔宇目町地区〕市川・友・志賀・猪野又・相田・和哥
山・矢野・田辺・佐保・首藤・富田・小間・米田・小
椋・菅原・野下・竜田。

〔上浦町地区〕森崎・青木・安部・江野畑・河本・樹
村・菊谷・高槻・中市・谷矢・中小路・中河・浜内・
本田・川上・坂本・蠣原・川元・白川・中西・大浜・
那木・神野・岡崎（以上最勝海浦）。今津・赤迫・木
村・曾根・中村・根木・野崎・藤田・松田・児玉（以
上浅海井浦）。

〔鶴見町地区〕芦刈・櫛谷・田島・庭瀬・軸丸・渡立
・井上・磯部・板垣・衛藤・島田・三又・赤崎・後田
・岡次・塩月・岡本・広津留・奥口・桑原・成松・鳩
石・牧野・脇坂（以上旧西中浦）。阿部・青柳・卜部
・木野・安倍・加島・亀井・浜田（以上旧中浦）。神
崎・小林・谷川・徳丸・野村・山野内・岡部・大西・
梶西・鶴見・土佐路・中路・永谷・山路（以上旧東中

浦）。

〔米水津村地区〕織戸・朝井・片島・小山・菅谷・金
崎・高宮・谷口・笹田・堀川・平間・三原・新地・福
永・水口・小武（以上浦代・小浦・竹野浦）。小森・
長船・金碓・俵・富松・坪矢・蛭子・赤江・小畑・大
沢・小田・魚見・増井・三宅・益田（以上色利・宮野
浦）。

〔蒲江町地区〕富高・高塚・古田・寺尾・飛高・間曾
・山鼻・脇谷・塩見・鳴海・木原・竹内・武中・中浜
・宮田・中藪・長瀬・三枝・磯貝・榎・久寿米木・河
内・倉橋・左脇・森・瀬口・日高・千崎・高見・富森
・中塚・浪井・鼻・西村・洲本・岩矢・水本・浅井・
浅野・奥村（以上旧上入津村・旧下入津村）。井川・
岩城・岩崎・長田・植村・海原・増野・竹中・武生・
中田・白岩・山野・結木（以上旧蒲江町）。岡野・小
島・増尾・夏田・牧口・高羽・津田・垣内・橋井・矢
倉・白倉・東木原（以上旧名護屋村）。（各地域に多
い苗字は重複を避けた）

佐伯地方の代表的苗字を抜粋して見ていえることは、

（この続きは41ページに続く）